

長安寺開基鳥居元忠

内藤恭義著



徳川二十将図
下から三段目、左から二人目
兜武者と向き合っているのが鳥居元忠



徳川20将に描かれた鳥居元忠

目次

はじめに	1
鳥居元忠の経歴	2
鳥居家計図（寛政重修諸家譜）	5
『甲斐国志』に見る鳥居元忠	6
天正十年郡内領主の変遷―元忠の郡内受封	10
鳥居元忠時代の谷村の宗教事情	12
鳥居元忠と長安寺	14
その後の鳥居家	17

はじめに

かつて武田氏に属していた小山田氏は郡内領主として谷村に在城していたが、天正十（一五八二）年武田氏は勝頼の時織田・徳川軍に敗れ、武田氏と共に小山田氏も滅亡することとなった。一時、織田信長の家臣川尻秀隆が甲斐の領主として支配したが、本能寺の変により再び甲斐国は北条と徳川とによる戦乱状態となった。和睦が成立してその年の秋より徳川氏の領するところとなり、徳川家康の家臣鳥居元忠が郡内領主として谷村に在城することとなった。この鳥居元忠の谷村への移封が遠因となって谷村に浄土宗寺院前城山（後に禪定山）智光院長安寺が誕生してくるのである。

長安寺の開基については『甲斐国志』卷之八十九 仏寺部第十七の上に

開山金蓮社匠譽上人感貞和尚（中略）遍歴諸州^一 天正十三^二 春来^三 本郡^ニ 謁^ニ 鳥居元忠^ニ
 帰敬之余留宿有^リ 日 終ニ 建^ニ 立^シ 一字^ヲ 於谷村城南^ニ 任^ニ 上人^ニ 因^テ 号^ニ 前城山智光院長
 安寺^ト

とあって、鳥居元忠が開基となり天正十三（一五八五）年に城の南に寺が建立され前城山智光院長安寺と名づけられ匠譽上人に寺を任せたことが知れる。即ち長安寺は時の郡内領主鳥居元忠の開基による寺院なのである。

この開基となった鳥居元忠とはどんな人物であつたろうか。長安寺の由緒として檀信徒の皆さんに理解を得たいと願って、鳥居元忠を紹介する。

鳥居元忠の経歴

鳥居元忠の祖先は源平合戦の頃にまで遡れる。高倉宮^{もちのくにのみや}以仁王の時代、紀伊国熊野権現の神職であった法眼重氏が熊野山に一の鳥居を建てたことにより鳥居と称するに至ったといわれ、鳥居法眼重氏を以て鳥居氏の祖としている。その子鳥居忠氏の時三河国（今の愛知県東部）矢作庄に移った。建武の中興の頃は新田義貞に属して巨新右衛門と称し、しばしば軍功をたてたといわれる。

元忠の父は鳥居伊賀守忠吉といい、家康幼少の頃からの忠勤めきんできた家臣と評されている。忠吉は生涯に松平清康、広忠、家康（当時は竹千代）の三代に仕えたのであるが、広忠の時、竹千代（家康）は織田氏の下で人質として囚われの身であった。広忠の死によって岡崎ではどうしても主君として竹千代に戻ってもらわねばならなかった。亡き主君広忠に代わって忠吉が率いる岡崎は天文十八（一五四九）年十一月織田信広のこもっている安祥城（現愛知県安城市）を陥れて信広を捕え、信広と竹千代を交換することによって尾張熱田に囚われている竹千代（家康八歳）を岡崎に取り戻すことに成功した。

しかし竹千代は岡崎で主君の身でありながら、城主として領国支配をするどころか安住することさえできなかった。三河松平の今川義元への従属の証として竹千代を駿府今川の下へおくことの要求を呑まないわけにはいかなかったからである。城主でありながら竹千代は駿府に人質として送られ、駿府からは今川の家臣が岡崎城代として送られてきたのである。このとき忠吉は岡崎松平の惣奉行として家臣を取締り、岡崎の安泰、幼主の安泰に万全を尽くした。

永禄三（一五六〇）年今川義元が西上したのにともない、家康も今川の部下として丸根城攻めに加わったが、この時忠吉は主君家康と戦いを共にした。義元が桶狭間で敗死したのを機会に、家康は岡崎へ帰り、今川氏から離れた。永禄五（一五六二）年家康が織田信長と結んで三河を平定したのを見届けて、元龜三（一五七二）年三月二十五日歿した。

忠吉の子元忠は天文八（一五三九）年生まれで、家康より三歳年上である。通称を彦右衛門と称し、十三歳より武人として松平家に仕えることとなるが、父に伴われて駿府に行き、最初から竹千代付きの勤務であった。竹千代十歳元忠十三歳で、兄弟のような年令差であった。年長ではあるが、主君を主君として仕えるよう父の訓戒きびしく、また、元忠自身も分をわきまえた立派な器量をもっていたといわれ、幼少からの主従関係が後の徳川臣僚体制を形成するのに大きな影響を与えたとされる。

このような関係から元忠の初陣は家康の初陣と同じで今川氏の下での寺部城（愛知県）攻めがはじまりで、以降、家康あるところに元忠ありの観があった。大高城の兵粮入れ、遠州懸川城（静岡県掛川市）の合戦、姉川（滋賀県）の合戦、長篠（愛知県）の合戦、諏訪原城の攻撃等と数えるにいとまのないほどであった。殊に天正三（一五七五）年諏訪原城攻撃のときは、案内役となって先鋒を受け持ち、銃丸に左の股を貫かれ、あやうく身も敵に襲われ、危機一髪の状態の中を家臣に助けられたものの、遂に生涯不具の身となった。

その後も乾城、田中城（静岡県）高天神城（静岡県）などの攻撃に軍功があった。天正十（一五八二）年北条氏の甲州攻略に対抗しての家康の甲州入りに際して際立った軍功があり、郡内領主として谷村入りした。十二年家康と信長の対抗となった小牧長久手（愛知県）の戦いでは北条の押へとして甲府を守り家康をして後願の憂いをなからしめ、十三（一五八五）年の真田幸昌率いる信州上田城（長野県）攻めにも大きな功勞

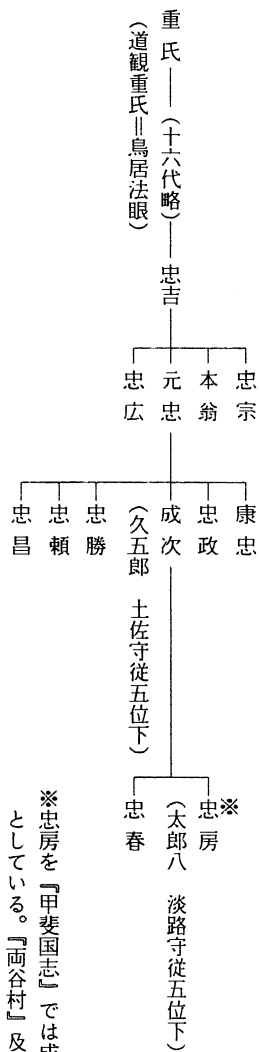
があった。十四年家康の上洛に従い、秀吉より官位を申し下す沙汰を受けたのを固辞し、さらに嫡子忠政を羽柴雄利の養子として秀吉に仕えさせよと命ぜられたのも固辞し、ただひたすらに家康に対する忠義一途の志を枉^まげることがなかった。十八（一五九〇）年小田原の陣には家康からは勿論、秀吉からも感状をもらうという戦功があり、家康の関東移封に伴って下総矢作（千葉県千葉市）四万石の領主となって郡内谷村城から移封していった。

鳥居家系図（『寛政重修諸家譜』）

『寛政重修諸家譜』にみる鳥居家系図には、次のように記されている。

鳥居（平氏支流）

伝へいふ、先祖は穂積氏にして、紀伊国熊野権現の臣、農見大臣重高の苗裔鈴木^{（或號）}某が末葉なり、世々神職の業を嗣、道観重氏が時にいたりて法眼に叙す、よりに重氏、熊野山に一の鳥居を建、これより世人呼で鳥居法眼と称す、終に称号となる。



※忠房を『甲斐国志』では成行（初名久五郎）としている。『両谷村』及び『甲斐国志草稿』は成興としている。本書では『寛政重修諸家譜』に拠った『都留市史』に従い忠房とした。

『甲斐国志』にみる鳥居元忠

鳥居元忠の生涯について人物往来社刊『家康の臣僚』にしたがって概要を述べたが、戦への参加は判っても武人としてどのように戦ったか、甲斐の国、とりわけ郡内とどのようにかわったかについては詳細が見えてこない。そこで『甲斐国志』に鳥居元忠の記述が若干見えるのでこれを紹介する。

『甲斐国志』巻之四十古跡部第三 鎌倉街道

北条勢が甲府・新府攻めを計画し、姥口（＝右左口・中道町）に在陣したことを記述したあと、

——古府ノ方、此ノ謀ヲ察シ却ツテ是ヨリ兵ヲ発ス。所謂鳥居彦右衛門元忠・内藤三左衛門信成・水野藤十郎勝成・松平備後守清宗・高力権左衛門正長・三宅宗右衛門康貞等千五百余兵ナリ。左衛門佐氏忠微勢ニテ油断シテアリケル処ニ、味方ノ邊兵急ニ攻メカカリケレバ大イニ敗走ス。内藤信成魁シテ敵ヲ黒駒ニ追ヒ入ル。北条勢モ返シ戦ヒテ水野勝成ガ士、大田仁蔵一番首ヲ得ル。鳥居元忠ハ敵ノ復路ヲ遮ギリケレバ、北条方擬議シテ進マズ。元忠ガ従士、鈴木源介一番ニ馳セ入ル。元忠旌ヲ揮ヒテ衆ヲ攻メ躬ズカラ馬ヲ入レル。故ニ其ノ隊百騎許リ、一度ニ競ヒ蒐メレバ、敵大イニ敗北シ、間宮新左衛門康高、田中五郎左衛門、中野氏ヲ初メトシテ多ク命ヲ殞シ、内藤信成ガ一隊ハ敵ノ首三十余級ヲ討取ル。（以下略）

これによると、

「鳥居元忠、内藤信成らの兵千五百は、油断していた北条氏忠軍に奇襲をかけたため北条勢は敗走した。内藤信成隊が先鋒となり鳥居元忠隊は北条の退路を遮断する形となり、北条勢が進退極まったとき、元忠の士鈴木源介一番槍にて攻め入ったのを機に、元忠自ら兵を率いて馬を入れた。そのため北条勢は大敗し、間宮康高ら名ある将兵の多くが命を落とした。」

とある。

この戦の結果北条勢は決定的な打撃を受け、北条氏忠も馬を失い福島丹波の馬を借りて味坂（御坂）城へ逃げ込む結果となった。

甲斐国志之巻四十一古跡部 第四 小山城墟

（前略）天正壬午ノ諸記ニ神君入御の節姥口御陣営ニ羽翼ノ為メ此ノ城ヲ修築アリ。鳥居彦右衛門ニ騎馬百三十、雑兵六百人ヲ与エテ守衛セシム。菅沼藤蔵、三宅惣右衛門相加ハルトナリ。古府ニ御宮移サレシ後ハ鳥居モ彼ニ移ル由、諸録ニ見エタレドモ、終始此処ニ在陣シテ都留郡ヲ押へ、後ニハ彼ノ郡一万八千石ニ封ゼラルルナリ。同八月十二日此ノ辺リニテ合戦アリ。（以下略）

これによると、

「小山城（高家村、現 八代町高家）は騎馬百三十雑兵六百計七百三十で鳥居元忠が守衛したところである。家康が姥口（右左口）から甲府へ陣を移すと共に元忠も甲府へ移ることとなったが、守備配置は変わらず都留郡の押へとして小山城に在陣し、後に都留郡に封ぜられることとなった。」とある。

これによって小山城主であったこと、騎馬百六十、兵六百の手勢を持っていたこと、都留郡に在陣する北条の押えの任にあたったこと、その功により後に都留郡の領主となったことが知れる。

『甲斐国志』巻之四十五 古跡部第八 仮御殿跡

——（前略）七月、中道右左口ヨリ入御、廿四日古府一ノ館へ入ラセラレ、又尊躰寺ニ御遷リ、八月十日新府ニ御陣ヲ移サレ北条氏直ト御対陣ニ及ブ。此ノ時市河ニ大須賀康高、右左口ニ松平主殿助家忠、小山ニ鳥居彦右衛門元忠、大野ニ松平玄蕃頭清宗等各々在陣シ（後略）これは徳川氏と北条氏との甲斐攻略の際の家康の動静を伝える項である。これによって鳥居元忠は小山城に在陣していたことが判る。

『甲斐国志』巻之五十八 神社部第四 神座山権現の項の内 山宮権現

——（前略）天正十年黒駒合戦ノ時鳥居元忠神領ノ山内ニ陣ス。神主武藤左衛門五郎、先隊ニ加ハリテ功アリ。凱陣ノ後、下黒駒村ノ内ニテ畑一町林八段ヲ賜フ（後略）これによって鳥居元忠が黒駒合戦のとき陣を山宮権現の神領にとったこと、山宮権現の神主が鳥居元忠に加担したこと、そのために神主に畑や林が与えられたことが判る。

『甲斐国志』巻之百 人物部第九

都留郡 称シテ云フ 郡内ト 賜フ 鳥居彦右衛門元忠ニ 治ス 于谷村ニ 十年十一月二十三日大畑ノ広教

寺ニ印書アリ其ノ頃入部セシヤラン以前ハ北条ノ兵当郡ニ撃チ入りテ暫ク掠略セリ、同十八年下総ノ矢作四万石ニ移ル

右によれば、郡内は鳥居元忠に与えられたこと。大畑（大幡）の広教寺に印書が残されているのでその頃郡内へ入部していたこと。それ以前は北条の兵によって郡内が略奪されていたこと。天正十八（一五九〇）年下総矢作（千葉県）へ移封となったことが知れる。なお広教寺への印書は現存する。

天正十年郡内領主の変遷―元忠の郡内受封

天正十年という年は甲斐国にとっても郡内にとっても大変な年であった。三月七日、郡内領主小山田信茂が織田信忠勢に殺され、三月十一日には甲斐国領主武田勝頼が現在の大和村田野で自刃すると、甲斐国は織田領となり織田信忠の先鋒を努めた河尻秀隆に与えられた。(小山田信茂の死を多くは三月二十四日とするが『信長公記』並びに『甲乱記』により三月七日とした『都留市史』と同じ見解をとった。)

約三ヶ月後の六月二日、本能寺の変で明智光秀謀反により信長が殺されると甲斐国は争乱状態となる。六月十八日に河尻秀隆が甲府で地侍一揆により殺されると領主不在の地と化し、隣国にあった徳川・北条の狙う地となった。郡内にはいちはやく北条が攻め込んでおり、谷村館は国中侵攻の拠点となった。忍草村渡辺庄左衛門宛の六月十九日付の感状が遺っており、この時の北条軍は北条左衛門太夫氏繁、氏舜^{きよ}、左衛門佐氏忠といわれている。

一方徳川家康は穴山信君と共に信長の催した宴に招待されたあと堺見物をしていたこともあって、甲州入りが遅れ、七月三日ようやく浜松を出発している。中道路に入り、八日に精進に宿泊、九日に右左口宿に到着し、十日に甲府へ入り、先発していた諸将や武田遺臣を糾合して体制を整え、その日のうちに若神子まで迫ってきた北条勢に対抗するため自ら新府城へ入った。

このように徳川軍の甲州入りは遅れたのであるが、何故か郡内入りした北条軍は御坂越えをしようとしなかった。それは北条勢が三方作戦を展開し、本隊は当主氏直が率い、滝川一益と交戦のあと碓氷峠から信濃

国佐久郡へ入り諏訪を経て甲州に攻め入るという北からの甲斐攻略と、北条氏邦軍雁坂峠越えによる笛吹川沿いの南下作戦と呼応し、一気に国中攻略を図ったためと思われる。そのために甲府に陣取った家康は約一ヶ月間北条勢を迎え撃つ準備態勢を整えることができたのである。

八月十二日には谷村城を拠点としていた北条氏忠が御坂峠を越えて黒駒へ攻め入り、甲府を守っていた鳥居元忠らが上黒駒でこれを迎え撃った。これを黒駒合戦というが武川衆らの活躍もあって徳川軍が大勝し、采配にあたった鳥居元忠の功績は特に大きかった。

一方、若神子で対陣中の家康と氏直とは対陣三ヶ月に及び、その間大きな合戦もなく、十月二十九日に和議が成立して北条軍は兵を引いた。

こうして甲斐国は徳川領となり、郡内領は甲斐侵略に功績著しかった鳥居元忠に与えられ、元忠は郡内領の拠点である谷村城に在城することとなったのである。(多くの書に郡内領一万八千石を与えられたと記されているが検地が行われ石高制となるのは文禄三年以降で、鳥居元忠の時代はまだ貫高制の時代であるため郡内領一万八千石が与えられたとするのは間違いである。)

元忠の郡内入部がいつであったかは明確ではない。和議の成立が十月二十九日で、都留市大幡の広教寺に残された制札文書が十一月廿三日付であるので、十月二十九日以降十一月二十三日の間に入部したことがうかがえる。居城は小山田氏の跡をうけ現在の市役所本庁の地と推定されている。

千午の乱といわれる天正十年は甲斐全体でみると、武田・織田・無領主・徳川と変遷し、郡内領は小山田・織田・北条・鳥居と領主がめまぐるしく変わった争乱の年であった。

鳥居元忠時代の谷村の宗教事情

武田氏と共に小山田氏が滅亡し、徳川領、織田領、豊臣領そして再び徳川領とはげしく変化していった時代の谷村の宗教事情にふれてみる。

小山田氏が亡びた天正十年の頃、既に存在していた谷村の寺院は法泉庵（法泉寺）、慈光寺（後に普門寺に合併）普門寺、円通院（その当時は竹か鼻即ち今の田町にあった。）、東漸寺、専念寺、称名院（現・西涼寺、その当時は曹洞寺院）、長生寺、西願寺の九ヶ寺であった。

宗派別に見ると曹洞宗が六ヶ寺、日蓮宗が一ヶ寺、浄土真宗が二ヶ寺で浄土宗寺院はなかった。

浄土宗は宗派上は天台宗、真言宗、律宗を除けば曹洞をはじめとする他の諸宗よりはやく開宗しているにもかかわらず谷村への浸透は遅れた。

この理由を宗派別にみると、質素を旨とする禅宗（曹洞宗・臨済宗）が武家に受け容れられ武田氏や小山田氏なども巻き込んだために谷村や郡内ばかりでなく甲斐国に大きな影響を与えたこと。日蓮宗は地理的に身延山久遠寺や大石寺などの本山が近かったこと、浄土宗から別れた浄土真宗は悪人正機、絶対他力の思想で諸民を対象としたために広く受け容れられたことによるものと思われる。

これに比べて浄土宗は万民が極楽浄土に往生するという説で、貴族から諸民にまで幅広い支持を得られたものの、本拠地が京都で遠く、また造寺造仏を必要としないということもあって、武田氏・小山田氏が亡びた時点では浄土寺院は谷村にも現在の都留市全域にもなかった。

そのような状況下で天正十年織田領から徳川領へと代わり、鳥居元忠が支配者として谷村に入部したのである。

鳥居元忠は墓所が京都知恩院にあるのをみてもわかるとうり浄土宗の信者であった。元忠が入部して三年目の天正十三（一五八五）年深蓮社匡誉上人感貞和尚が谷村を訪れた折、元忠は感貞和尚と会見し、帰依するところとなり、小山田氏別荘跡に寺院を建てて感貞和尚を開山に据えたことによって浄土寺院がはじめて谷村に誕生した。この寺院こそが前城山（禅定山）智光院長安寺なのである。

その後まもなく曹洞宗称名庵が浄土宗に改宗して西涼寺が誕生し、やがて長安寺二世吟応上人の弟子成誉上人によって古川渡に念崇寺が誕生し、浄土宗の広まりの要素は整ったのであるが、江戸幕府による宗教統制の時代へと入り、郡内ばかりでなく甲斐国全体としても各宗派の拡大競争は沈静化するのである。

鳥居元忠と長安寺

『甲斐国志』の項を見ると巻之八十九仏寺部第十七ノ上に「禪定山長安寺」の項がある。開山は金蓮社座
譽上人感貞大和尚で七歳で武州神奈川の慶運寺の僧となったことを記したあとで

遍^ニ歴^シ 諸州^ヲ 天正十三^乙 春來^リ 本郡^ニ 謁^ニ 鳥居元忠^ニ 帰依之余留宿^ス 有^{レリ} 日終^ニ 建^立
一字^ヲ 於谷村城南^ニ 任^ニ 上人^ニ 因^テ 号^ニ 前城山智光院長安寺^ト 神祖御巡見之日御^ニ 寄宿^{アリ}
谷村陣屋^ニ 問^フ 感貞^ヲ 於鳥居元忠^ニ 時^ニ 師臥^{レシ} 病^ニ 不能^ハ 拝謁^{スルコト} 神祖使^メ 元忠^ヲ 寄^シ
言^ハ 感貞^ニ 云^ク 師ノ勤行聞^ユ 一宗^ニ 宜^シ 立^テ 法幢^ヲ 為^ヒ 指^ニ 南^{スルヲ} 於近国ノ門侶^ニ
師厭^ヒ 栄名^ヲ 終^ニ 不^レ 諾^セ 時^ニ 神祖賜^フ 之^ニ 茶壺一口^ヲ

これと同文は巻之五十三古跡部第十六之上にもあって「茶壺一口」に続いて

是レ所謂本丸ニ御入駕ノ時ノコトナリ感貞ハ長安寺開山ニテ元忠ノ帰依僧ナリ其ノ時拝領ノ茶壺
今ニ寺宝ニシテ伝ハレリ（以下略）

とある。この『甲斐国志』の文は古文体でこの部分は漢文でもあり、やゝ難解と思われるので解説を加える。

開山金蓮社座譽上人感貞大和尚は神奈川の慶運寺で僧の修行をした後、浄土宗布教のため諸国遍
歴の旅に出た。天正十三（一五八五）年の春、谷村には鳥居元忠が城主として在城していた。座譽
上人は城主鳥居元忠に拝謁することができた。元忠と感貞上人との対談は大いに深まり、上人に帰

依すること尋常でなかったので座譽上人はそのまま谷村に滞在していた。幾日かたって元忠は谷村
城の南に館を建てて、感貞に住職を任せた。谷村城の即ち前方にあるため前城山智光院長安寺（今
は禪定山と山号が変えられている）と名がつけられた。

家康は甲州巡見にあたり、谷村城に入ると感貞和尚の消息を元忠に尋ねたのである。その時は感
貞和尚は病床にあって拝謁することができなかった。そこで家康は元忠を通して「感貞の仏道への
つとめぶりを宗徒宗門から聞いている。ついては近国の宗門僧侶の師として指南をするよう法幢を
たててはどうか」と問われた。ところが感貞は、「名譽あることであるが名譽を授かることは性に
合わない」と、これを辞退したのである。そこで家康は感貞和尚に茶壺一口を贈った。

このことはいわゆる家康が本丸にご入駕の時のことである。感貞は長安寺開山であって鳥居元忠
が心から尊敬し帰投依伏した僧である。その時家康より拝領した茶壺は今も長安寺寺宝として伝わっ
ている。

と記しているのである。

このような『甲斐国志』の記述によって、時の支配大名鳥居元忠が長安寺開山感貞和尚と特別な関係にあっ
たばかりでなく、家康とも関係があったことが知れるのである。

余談であるが、本丸即ち本城は現在の市役所本庁で、家康が休んだ場所は書院の間と伝えられている。そ
の跡地は長く禁忌地として草むらのままであったが、後年代官佐々木道太郎の頃、草むらのまゝであった地
に東照宮が建立された。この東照宮は明治大正を経て昭和の初めに谷村高等女学校が建設されたこと、さら



家康より拝領した茶壺

に増築に伴い二度ほど位置を変えたあと城山山頂に遷座されている。家康の宿泊地跡は谷村高等女学校校舎から都留文科短期大学校舎となり、さらに都留市役所庁舎地へと変遷している。また、この時の茶壺は都留市有形文化財に指定されていて、現在も長安寺接客の間に保存されている。

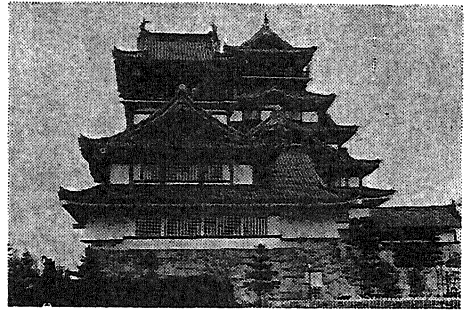
その後の元忠と鳥居家

天正十八（一五九〇）年、天下統一をはかる豊臣秀吉は東国の雄北条氏の攻略に着手し、徳川家康に先鋒として出陣することを要請した。北条氏と隣接して東の押さえ役にあった元忠は北条氏に最も近く、北条を最もよく知る者として先鋒中の最先鋒の役を担い、かつ家康の参謀陣の一人として、極めて重要な役割を担うこととなった。元忠は武蔵国岩槻（埼玉県）相模国築井（神奈川県津久井）等で目覚ましい活躍を見せたが全体的には織田、徳川連合軍という大軍の包囲の中、北条勢は小田原評定を繰り返し返すばかりで大した戦闘も展開されないまゝ北条氏は亡びた。この戦いによって元忠は家康からも秀吉からも感状をもらっている。戦功は大きかったものと思われる。

戦後、秀吉の指示に従って家康は東海五ヶ国を放棄し、北条氏の領有した関東八ヶ国を与えられて居城を江戸城に移した。

この結果、鳥居元忠は家康の領する下総国矢作（現在の千葉県千葉市）へと国替えとなった。まだ検地が行われていない時代で石高で領地を比べるのは適当ではないかも知れないが、郡内は後の文祿検地で一万八千石、矢作は慶長検地で四万石となっているので、元忠の功績は非常に大きかったといえよう。徳川領であった甲斐の国は豊臣領となり、国中領は羽柴秀勝から加藤光泰、さらに浅野長政へと領主が引き継がれ、郡内は秀勝家臣三輪五郎右衛門近家、光泰家臣加藤光吉、長政家老浅野氏重と領主が変わった。

慶長五（一六〇〇）年、家康は会津征伐のため東下するにあたり、六月十七日伏見城に鳥居元忠、松平家



伏見城

係で長生寺に安置されている。

忠、内藤家長、松平近正を召し、京都をあけることによって気がかりな石田三成らの動きに対応するために伏見城に残って西を守ることを命じた。案の定、家康の東征がはじまるのを見届けるかのように、三成より使者が送られ、元忠らに対して伏見城の明け渡しを求められたが、一同これを拒絶し、廿五日より始まった大阪方の大軍を引き受け、孤立無縁の苦戦を続けた。八月一日遂に戦いは利あらず、諸将相次いで戦死し、元忠も最後まで戦闘い秀頼の足軽大将雑賀孫市重次によって討たれた（自刃説もあるが寛政重修諸家譜に拠った）。時に元忠六十二歳、忠烈無比の臣とたたえられるにふさわしい最期であった。この時の伏見城鳥居元忠血染めの天井は養源院（京都市）に移築され、今も戦国の歴史を伝えている。

戒名は長源寺殿淵室源公居士で位牌は次男成次が長生寺檀家であった関

元忠には男子六子があり、そのうち三男の成次は関ヶ原の合戦後甲斐国が徳川領となるに及んで、浅野氏重の後を受けて郡内谷村藩一万八千石の領主として入部してくるのである。こうして郡内は元忠のあと加藤氏によって三年、浅野氏によって七年の後、再び元忠の子成次、その子忠房と、鳥居氏による行政が続いたのであったが、徳川忠長卿の国除に関連して家老の身であった責任上、寛永十（一六三三）年鳥居忠房は領地を召しあげられ、秋元藩へとバトンタッチされていたのである。

長安寺開基鳥居元忠

平成十三年七月二十日 発行

著者 内藤 恭 義

都留市上谷五一五―一三
〇五五四―四五―〇九三八

発行者 長 安 寺

都留市市上谷三一六―三〇
〇五五四―四三―〇八五〇

印刷 レオンプリント社

都留市上谷三一四―二九
〇五五四―四五―〇九三八

発行所 なまよみ出版

（レオンプリント社出版部）